

老舎研究会会報 第12号

胡絮青女士 題字

会の灯をともし続けたい

杉本達夫

一昨年の大会のあと、藤井栄三郎先生のあとを受けて、代表委員をつとめることとなった。会員の皆様のお助けを切に願います。事務局は平松圭子先生にお願いした。

会の活動としては、年一回の大会が中心となろう。従来もこじんまりとした会であったし、今後もおそらくそうであり続けるだろうが、会の灯はともし続けなくてはと念じている。老舎研究者と老舎読者を交えた交流の場として大会（および懇親会）があるが、加えてもうひとつ、やはり会報が継続するほうがよい。というわけで今回の復活となった。今号は資料的記事を中心に編んだが、次号以降は会員各位のなまの声——研究報告や読書感想を含めて——がきこえるようにできればと考えている。また、会員名簿も更新した。各位の周辺の老舎に関心のある人々に、特に若い世代の人々に、入会を呼びかけていただきたい。

来年2月には老舎生誕百年を記念して、北京で国際シンポジウムが開催される。日本からも多くの会員が参加され、論文その他多くの成果が生まれることだろう。それが来年の大会や会報に反映されることを期待しよう。

柴垣芳太郎先生を追悼して

(一)

1996年7月3日、長い間老舎研究会代表委員の任にあった柴垣芳太郎先生が亡くなられた。とても残念であるが、心から御冥福をお祈りする。

第一回研究会が開催されたのは、84年3月17日。その前年から発起人会組織を呼びかけ、研究会を発足させた。その後90年まで会の運営に当たられるかたわら、中国との学术交流や、中国各地の新聞、雑誌に登載されたぼう大な数にのぼる老舎の作品、随筆、評論などの収集に力を注いでおられた。

95年東方書店から出た『老舎と日中戦争』は十年間にわたり先生が集められた資料一部分について解説されたご労作である。

天国からこの小さな老舎研究会を見守っておられることであろう。（平松圭子）

(二)

櫻井龍彦

柴垣先生との思い出はつきない。なにしろ

私が大学に入って一番最初に中国語を習った先生であるし、龍谷大学に呼んで下さったのも先生だからである。公私ともどもこんなにお世話になった先生はいない。

しかしお世話を頂いた私の方が、先生にどれだけの恩返しができたかという、内心忸怩たる思いがする。特に老舎研究会については、その創設に私も多少関わったが、その後の運営については先生にご満足いただけるような活動はしなかった。おそらくこの点において、先生は随分と落胆されたことと思う。そのお気持ちが察せられるだけに、私が職場を関西から名古屋に移し、先生と身近にあれこれご相談できるにもかかわらず、そうしなかったがために、先生はますますご不満もたれたことと思う。研究会からも足が遠のき、会員の皆様方もご不満を抱かれたかと思う。

その後、なにがきっかけでまた先生とお会いするようになったのか、今となっては、思い出せない。ご自宅に呼んで下さり、呼んで下されば必ずごちそうを出して下さる。以前とまったく変わらず、また何事もなかったかのような優しいご夫婦のままである。師を悲しませる弟子ほど始末の悪いものはないといま自分が何人かの指導生をもつ身になってつくづく思う。

お亡くなりになる直前、病院にお見舞いに行った。東方書店から御著書を出版し、その祝賀パーティーも終わり、かつての教え子たちと再会できて、先生もお喜びだったと思う。病院には、そのときの記念写真がご子息たちの手できれいにアルバムの中に整理されていた。あとからお聞きした話では、ガンの告知はご子息の胸におさめられ、奥様にだけは知らされていないかったという。さぞや心をこめて、一枚一枚の写真を大切に並べられたことと思う。

アルバムを拝見しながら、私が当日スピーチをした場面の写真が出できたところで、胸が一杯になる思いがした。ご子息たちはパーティーの様子を本当にうまく編集され、ス

ピーチの内容などを巧みにキャプションとして書き込まれていたが、私のあつかいは明らかに他の人たちとは異なっていた。写真の数も説明文の長さも、断然他の人たちより多かったのである。

私をこのようにあつかって下さるご家族の気持ちは、明らかに柴垣先生のお気持ちでもあったはずだ。日頃から先生はご家族に、私のことを先生にとっての最もよき理解者としてお話しして下さっているに違いない。それに値しない自分は慚愧に耐えなかった。とくに先生が体調をくずされてから、一体自分はどれだけ先生のお手伝いをしてきただろう。それでもご家族は私のことを特別に見ていて下さる。病院を出て、バス停でバスを待つあいだも、バスに乗ってからも涙が止まらなかった。

第1回研究会（1984）より第14回（1997）までテーマと発表者

- 第1回 1984年3月17日 名古屋大学
老舎年譜のいくつかの問題について 斎藤匡史
『駱駝祥子』評論史略 倉橋幸彦
中国の「本色教会」運動と老舎
渡辺安代、高橋由利子
老舎の短篇小説のモチーフと模索
について 藤井栄三郎
- 第2回 1985年7月20日 名古屋大学
老舎の現代詩について 雲野葉子
『茶館』について——そのテーマ
と新しさに関する考慮 石井康一
『文博士』について 日下恒夫
『茶館』舞台上演における音声上
の2, 3の問題 岡部謙二
- 第3回 1986年7月19日 名古屋大学
老舎作品中における“犠牲”につ
いて 倉橋幸彦

『火葬』と重慶北碚における老舎
の生活 平松圭子
「文協」の財政と老舎 杉本達夫
老舎のリアリズムとキリスト教
藤井栄三郎
試从文学欣賞角度談老舎作品中
的北京話 李玉敬

第4回 1987年7月15日
愛知県婦人文化会館
現代文学中的宗教諸問題 劉孝春
“写家”老舎 倉橋幸彦
香港老舎生活歷程展 (一)
飯泉彰裕
香港老舎生活歷程展 (二)
平松圭子

第5回 1988年7月16日
中京大学八事学舎
『老張的哲学』をめぐる二、三の
問題 杉野元子
『駱駝祥子』をめぐって
金森由美子
老舎初期の作品に見られる語法に
ついて 大塚秀明
『茶館』の版本について
高橋弥守彦
老舎短篇小説の研究について
伊藤敬一
『老舎事典』について 中山時子

第6回 1989年7月15日
中京大学八事学舎
老舎の戯曲に見られる語法上の特
徴 大田加代子
「小人物自述」に見える老舎の自
伝観 松村茂樹
渡英以前の老舎 杉野元子
『茶館』成立考 石井康一
『猫城記』の評価をめぐって
日下恒夫

第7回 1990年6月23日
中京大学八事学舎
『茶館』の言葉について
岡本俊裕
「滿族作家」老舎の誕生をめぐっ
て 倉橋幸彦
『四世同堂』は本当によみがえっ
たか 日下恒夫
中山高志先生邦訳『駱駝祥子』の
経過について 今富正巳
談『从祥子人格結構的變化』
李輝

第8回 1991年7月26日 関西大学
孟広来先生的老舎研究 孟丹
最近の老舎研究あれこれ
倉橋幸彦
老舎の文人観および文人趣味観に
ついて 松村茂樹
老舎の音感——擬声詞の形態論的
特徴 中野耕市
老舎のことは遣い 尾崎實

第9回 1992年7月24日 関西大学
自らを北京に埋めた男祥子
谷川毅
老舎の西北旅行 杉本達夫
『駱駝祥子』の言語特色
橋本幸枝
『駱駝祥子』における“概数”
牛島徳次

第10回 1993年7月23日 関西大学
「王氏論文」をめぐって (紹介)
倉橋幸彦
ふたたび老舎の足跡を 布施直子
京都老舎を読む会——『老舎集外
集』を読む中で 藤井栄三郎
私と老舎 柴垣芳太郎

第11回 1994年7月26日 関西大学
映画(ビデオ)『城南旧事』鑑賞
『剣北篇』を読んで 布施直子
老舎作品の世界——笑いの視点から
渡辺武秀
修辞から見た老舎のユーモア表現
平松圭子
城牆天橋四合院、駱駝祥子滿街跑
林海音

第12回 1995年7月28日 関西大学
老舎ともう一人の英国人(ビデオあり)
高橋由利子
『駱駝祥子』の注釈について——
語学的な若干の問題
牛島徳次
雑話老舎 范亦豪

第13回 1996年7月26日 関西大学
『駱駝祥子』についての試論
花城可裕
老舎と蕭乾
『大悲寺外』と『歪毛児』——老舎
におけるキリスト教
藤井栄三郎
从阿倍談起——読老舎先生旧体詩
「遊日十七首」 王端

第14回 1997年7月25日
早稲田大学
它、牠、他——微神の中のある代
名詞について 杉本達夫
老舎小説の愛 渡辺武秀
ビデオ「老舎」の鑑賞と説明
中山時子
満州族の現代作家たち 牧田英二
論『四世同堂』的文化批判意識
郝長海

老舎関係文献略目(1)
倉橋幸彦

1992年分については、日下恒夫・倉橋
幸彦編『近十年来日本老舎研究簡介』(以下
参照)以後を採録することにするが、同目録
に漏れている二点をここに新たに載せておく。

【1992年】

尾崎 實 老舎の小説における“為是”の
用法
『関西大學文學論集』第41巻第4号
(3月31日) P.77-93
→『中国関係論説資料』(論説資料
保存会)第34号第二分冊
*「本稿は、1991年7月26日、
関西大学で行われた老舎研究会の
席上、口頭発表した「老舎のこと
ば遣い」の一部を補筆したもの。

石井 康一 老舎『茶館』成立考——知識人
を描いた戯曲の系譜
『未名』(中文研究会)第10号(3月)
P.111-127
*「本稿は第42回日本中国学会大
会(90・10・20於駒沢大学)にお
ける口頭発表「老舎『秦氏三兄弟』
について—『茶館』成立過程につ
いての一考察」をもとにしたもの。

日下 恒夫・倉橋 幸彦
近十年来日本老舎研究簡介
首届国際老舎學術討論会配布資料
(8月23日)16頁
*1984年3月から1992年8月ま
での日本人及び日本で発表された
老舎文献目録。[付録]に、「中山
時子編『老舎事典』(大修館書店
刊)内容」・「(日本)老舎研究会大
会記録」・『老舎小説全集』全10

卷（学習研究社刊）内容」を含む。

竹内 実 老舎の愛した北京情調
『世界の都市の物語 9 北京』（9月20日 文芸春秋社刊）P. 32—36
*上書〈序章 ペキンの魅力〉の一節。「想北平」の抄訳を引用。なお、同書は『正紅旗下』（p214）と『路駝祥子』（p.350）にも言及する。

中藪 英助 （小説）彷徨湖
『北京飯店旧館にて』（10月20日 筑摩書房刊）P. 147—169
*老舎の死を題材にした小説。初出は未見ながら、〈後記〉には「このたび一本にまとめるにさいして、全面的に書き改め、新しい連作小説集の体裁をととのえた」とある。因みに、この小説は北京を題材にした連作小説集の第七話。

題名の「彷徨湖」は、現在では地図からも消えてしまった老舎が投身自殺した「太平湖」を「スウェン・ヘディンの彷徨よえる湖」に喩えたもの。

なお、小説中に「想北平」の一節が引用されているが、このエッセイは、作者にとって「最も好きな珠玉のエッセイ」（『わが北京留恋の記』1994年2月23日 岩波書店刊、〈プロローグ—中国 わが痛みと愛〉）である。

「北京が北平だったころだが、「想北平」というタイトルは、単に「北京を想う」ではなくて、「北京を慕う」と訳した方がよいと思っている。何という懐かしさというパラフレーズを従えた、北京恋いの文章である。」

杉本 達夫 老舎の西北旅行—ふたたび『剣北篇』をめぐる—
『相補果先生追悼中国文学論集』（12月27日 相補果先生追悼中国文学論集刊行会刊、東方書店）P. 57—72

谷川毅 「離婚」と北京
『相補果先生追悼中国文学論集』（12月27日 相補果先生追悼中国文学論集刊行会刊、東方書店）P. 35g—378

柴垣芳太郎 老舎著作解題（その2）
—1933年～1935年—
『北陸大学外国学部紀要』第1号（12月）p. 63—87
→『中国関係論説資料』（論説資料保存会）第35号第二分冊

【1993年】

宮本輝 老舎「茶館」
『本をつんだ小舟』（1月25日 文芸春秋社刊）p. 149—157
*初出未見。なお、〈あとがき〉によると、「クレジット・カードの会社が発行する機関誌」『THE GOLD』が、初出掲載誌とのこと。

渡辺武秀 老舎『猫城記』試論
『八戸工業大学紀要』第12巻（2月）P. 167—181

藤井栄三郎 老舎の「大悲寺外」
『中国語』第399号（3月15日）P. 1

杉本 達夫 老舎の有声的呐喊与無声的呐喊—關於老舎対北路慰勞团的態

度一『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第 38 輯文学・芸術学編 (2月27日) P.71-78
→《中国現代文学研究叢刊》93 年第 2 期 (5月) P.196-205
* [附録] 關於老舍与北路慰勞团的資料 I.北路慰勞团的活動時期 II.該团的旅程 III.訪問辺区時的成員 IV.北路慰勞团和政治部政工視察团在辺区的日程 V.老舍回来以后写的有関文章、有関作品
* 第 1 回老舍国際学術討論会 (1992・8) における「老舍与北路慰勞团」の「発言稿に些少の加筆修正を施したものである。」

杉本 達夫 老舍国際学会参加記
『東方』第 145 号 (4月5日) P.2-4

平松 圭子 (BookReview) 彷彿とする老舍の北京『旧京大観』『北京往事録』『東方』150 号 (9月5日) P.34-37
* 老舍作品のディーテールを、表題二作で検証した書評。

日下 恒夫 老舍—北京の作家
『泊園』(泊園記念会) 第 32 号 (9月20日) P.35-74
* [資料一]「著者略歴」(老舍「小型の復活 (自伝の一章)」)
[資料二]「老舍略年譜」
[資料三]『駱駝祥子』訳書目
[資料四]「学研版『老舍小説全集』内容一覧」
(付)「北京を知るための極略目」を含む。

* 第 32 回泊園記念講座 (平成 4 年 11 月 20 日、大阪府立文化情報センターホール) における同題講演の速記録を一部加筆。

平松 圭子 『方珍珠』について
『大東文化大学創立七十周年記念論集 (上巻)』(9月20日) P.317-330
→『中国関係論説資料』(論説資料保存会) 第 35 号第二分冊

岡本 俊裕 中国語における二音節単語の受容について—老舍《茶館》を主な材料に—
『京都外国語大学研究論叢』41 (9月30日) P.360-365
→『中国関係論説資料』(論説資料保存会) 第 35 号第二分冊
* 「本稿の内容の一部はずいぶん以前に」、「老舍研究会大会 (1990・9・30 於中京大学)」と「日本中国語学会第 40 回大会 (1990・10・14 於京都産業大学)」の「二つの場で口頭発表を行った。」

斎藤 匡史 老舍—職業作家への道—
『中國文學論集』(九州大學中國文學會) 第 22 号 (12月25日) P.85-102

柴垣芳太郎 老舍著作解題 (その 3)
— 1936 年 ~ 1937 年 —
『北陸大学外国学部紀要』第 2 号 (12月) P.171-184
→『中国関係論説資料』(論説資料保存会) 第 36 号第二分冊

「第六次全国老舍学術討論会」について

花城 可裕

第六次全国老舍学術討論会は、1994 年 7 月 19 日から 27 日にかけて長春において開催され、日程は以下の通りであった。

19日 出迎え
 20日 開会式 吳祖光(老舍学会会長)挨拶など
 発表[テーマ1 老舍研究の研究]
 吳小美(蘭州大学)「老舍研究的回顧与展望」
 舒乙(中国現代文学館)「再談老舍之死」
 苗稼全(北京市文連)「北京市老舍講座会情況」
 王曉琴(首都師大)「從当代台湾学人筆下的老舍管窺台湾老舍研究之時点及趨勢」
 発表[テーマ2 老舍生平、思想及文学觀念研究]
 王延晞(山東大学)「略論老舍的愛国主義思想」
 孫絜(復旦大学本科)「老舍生命觀探索」
 石興澤(聊城師院)「老舍文学思想的生成与發展」
 21日 発表[テーマ3 老舍与東西文化]
 関紀新(中国社科院)「老舍:民族文学流變中的多重意蘊」
 高橋由利子(上智大学)「老舍和兩個英国人」
 舒濟(人民文学出版社)「老舍作品中使用北京土語的問題」
 徐德明(揚州大学)「老舍与中国傳統文学」
 王曉琴(首都師大)「老舍与中国現代鄉土文学」
 郭錫健(塩城師院)「老舍作品的文化底蘊」
 謝昭新(安徽師大)「老舍与吳梅村比較」
 史承鈞・伍斌(上海師大)「老舍与西方現代文学」
 丁戈(吉林大学研究生)「老舍国民改造觀中的基督教意識」
 張福貴(吉林大学)「老舍国民性改造的價值取向」
 発表[テーマ4 老舍作品研究]
 于是之(北京人芸)「談老舍的《龍鬚溝》与《茶館》」
 曾広燦(南開大学)「略論《駱駝祥子》的文化意蘊」
 娜・柯吉涅茨(ロシア)「老舍的第一部長篇小説」(舒乙代読)

張桂興(山東師大)「關於老舍旧体詩創作」
 朱雪艷(黑龍江社科院)「老舍劇作的審美特徵」
 許正林(中南財大)「試論老舍的散文創作」
 李大朋(吉林芸術学院)「論老舍戲劇結構特色」
 王海波(人民文学出版社)「論老舍的幽默芸術」
 郝長海(吉林大学)「老舍的悲劇意識与憂患意識」
 孫 藜(吉林大学)「從《牛天賜伝》看老舍的教育思想的一個方面」
 関曉松(吉林大学)「對《駱駝祥子》悲劇原因的一点思考」

22日 伊通滿族民俗館參觀(伊通県)
 23日 閉幕式
 24日 長白山旅行(～26日)
 27日 見送り

4年前のことなので、記憶ははっきりしないが、提出題目以外の発表をした人もいたことを覚えている。また、配られた発表資料には、上述したもの以外に、

程麗紅(吉林大学中文系)「漫談老舍小説中的愛情描写」

王曉琴(首都師大)「老舍話劇的民俗美初探」

曾広燦(塩城師專)「論老舍早期的思想信仰」

Britt E. Towery, Jr. [漢名、陶普義](Baylor Univ. U.S.A.)

「Lao she, Master Storyteller—China's People's artist」

があり、著者より以下の著書も参加者全員に配られた。

『老舍年譜』郝長海・吳懷斌編 黄山書社
 1988年9月

『老舍小説芸術心理研究』謝昭新著 北京十月文芸出版社 1994年3月

『老舍論稿』王延晞著 山東大学出版社
 1994年2月

『老舍文学思想的生成与發展』石興澤著

山東文芸出版社 1993年10月
『老舎旧体詩輯注』張桂興編注 中国礦業
大学出版社 1994年6月
『老舎創作論』張慧珠著 上海三聯書店
1994年1月

討論会が長春において開催されたのは、老舎が満族であるという理由からであったが、老舎と満族との関係について述べられたのは関紀新先生のみであった。それよりはむしろ中国伝統文化との関わりを論述したものが多く、呉小美先生の「老舎の思考は全くの新儒家である」、郝長海先生の「我々は知識人として老舎をどのように評価すべきか」という発言が印象深く、今においても思い起される。

東京、関西の老舎読書会について

東京および関西で行われている二つの老舎読書会の近況を知らせていただいた。東京では中山時子先生による「老舎を読む会」、関西では藤井栄三郎先生の「月例研究輪読会」である。ほかの地区でも読書会等行っておられる所があれば近況をお知らせいただきたい。

(事務局)

老舎を読む会の活動について

中山時子

昭和26年湯島聖堂で斯文会の行事の一環として中国語の講習会が開催された。翌年特別講読クラスを作り、水世嬋女士を講師に招いて毎週日曜日午前10時から12時まで、老舎の作品の味読を開講した。これが現在の「老舎を読む会」のもとになっている。以来47年間今日まで、会場も移り講師も何代か変わったが老舎の味読は延々と続けられてきた。

講師には原則として北京語を話し、日本語を解されぬ中国人を招き、私たちは中国語のみの解説によって、老舎の作品を読む。これが本会の活動の方針である。『月牙兒』など短篇小説、『二馬』、『離婚』、『駱駝祥子』を

読み、現在は午前は『老張的哲学』、午後は『四世同堂』を読んでいる。

老舎とゆかりのある人や研究者が来日されると、会に招いて老舎や彼の作品について講演をお願いした。近年では老舎の長女舒濟氏、長男の舒乙氏、舒濟氏の夫王端氏、研究者では范亦豪氏、王潤華氏、林海音氏である。これらの講演は中国語原稿、日本語訳もできおり発表の機会ができることを願っている。

会員の多くは「老舎研究会」のメンバーであり、また「老舎故居の復元を賛助する会」の協力者でもある。1999年2月3日老舎生誕百年記念に举行される故居復元完成の式典に参加できるように中国訪問を企画している。

この数年「老舎の足跡を訪れる旅」を何回か実施し、北京の老舎生家をはじめ済南、青島、武漢、重慶、北碚などの故居を訪れた。これら貴重なフィールド・ワークの成果はビデオ「老舎」(1~4集)2巻、大画冊「老舎」、大写真集「老舎」に収められている。

今日までの活動概況をごく簡単にまとめて記したが、会員有志から寄せられた「一言」があるので、その要旨のみを付記しておく。

中国語の講義を聴きながら作品を理解する楽しさ、日曜日は中国語のシャワー浴、美しい中国語のサウンドに酔っている。(稲田直樹、小林利江、菅野百合子、多田正子、村山裕子、吉田久子)

美しい北京語の講義で、老舎の世界に浸っている。再び『祥子』を読み返している(小松照子、清水信夫)

『四世同堂』の中の英語を話す平和主義のやさしい日本婦人は、老舎がアメリカ滞在中に交流のあった石垣綾子の投影ではないだろうか(須藤 浩)

講義の中で紹介される成語、諺語、俗語を学習するのも魅力の一つ(渡辺紀子)

湯島聖堂時代から参加して現在も中国語の学習を楽しんでいる。(植木 敦)

水世嬋先生の思いで(武永尚子)

関西地区老舎研究会の月例研究輪読会

藤井栄三郎

関西地区老舎研究会の月例輪読会は日本の老舎研究会が成立した84年の初秋に始まっている。そして、この年の四月に青島で開催された「第二屆老舎學術討論會」に、日本の「老舎研究会」としてはじめて会員有志が参加したのだが、其の際会員の中から老舎の作品を読む会をやってほしいという提案があった。帰国後そのことを代表委員の柴垣芳太郎先生に相談すると、それは研究会の仕事として望ましいので是非やっていたきたい、会場は竜谷大学の共同研究室を使えばよろしい、と言われたので、「関西地区老舎研究会第一回例会」を、84年9月1日(土)午後2時から、竜谷大学深草学舎紫英館第二共同研究室で開催した。「第二次老舎學術討論會参加旅行報告」と題して、金森由美子氏と小林康則氏の青島、済南、北京各地訪問の報告や写真の展示があり、私も青島での中国側の発表の記憶に残ったものについて紹介した。その後で、第二回以後の行事について相談し、①毎月第三土曜日午後2時より5時まで、②輪読形式で、まず『老舎小説集外集』を読むことにした。以後昨97年12月に、暫く中止また機会を見てと相談が決まるまで、13年間もこの輪読会は続いたのである。それは基本的には何と言っても竜谷大学専任の諸先生の、毎回会を開催するために払って下さった尽力に負うところが大きい、会の開き方がかなり緩やかであったことも幸いしたかも知れない。一応第三土曜日と規定してはいるが、毎回の終わりに次回の出席の都合を確かめ、出来るだけ誰にも支障のない土曜日を選んだのである。中国人の語学文学研究者もまじえて、問題の箇所があれば色々な視点から意見を交わし、妥当と思われる解釈と訳文を追求したので、なかなか面白い問題提起に、ぶ

つかることもあった。かなり精密な検討を行い、語学、文学、政治から市井風俗の些事に至るまで、興味ある情報交換が行われ、お茶を飲みながら延々と時を忘れることもあった。こんなふうにより進む上に、研究会年次大会のある7月と、中国旅行の多い8月、学年末で多忙を極める一月は休会としたのだから、13年間に『老舎小説集外集』一冊と『趕集』の三分の二『柳家大院』までで終わったのも当然である。しかし日中の研究者にとって、お互いに得るところの多い研究会であった。出席者から文献資料や写真、図版等のコピーが配られたり、しばしば笑いも起こる楽しい研究読書会であった。ただ、今年からは、出席者の多くが専任就職等のために出席出来なくなったので、一休みしてまたの機会に、ということになった次第である。毎回出席者は7、8名前後であった。13年間の出席者の顔触れを思い出すままに記すと、桜井龍彦、稲葉昭二、陳謙臣、金子真也、小林康則、中みき子、金森由美子、下条新太郎、黄媛玲、藤田昌志、石井康一、吳宝栄、陳洪傑、衛裕群、卞惟行それに筆者である。最後の担当者は陳謙臣氏で作品は『歪毛児』であった。

終わりに当たって、この会の運営のために13年間多大の犠牲を払って下さった、竜谷大学中国語専任諸先生には改めてお礼を申し上げます。1998, 5, 30

老舎短信

◆1999年2月3日は老舎生誕百周年に当る。その記念事業の一環として、2月3日から7日まで、「老舎と二十一世紀」を統合テーマとして、北京で「老舎百年學術シンポジウム」が開催される。(「研討會」の挨拶状による)

◆老舎が六十年代初めに歌劇台本『拉郎配』を書いていたことが明らかになり、去る4月、

山東省濱州地区で、同作品をめぐるシンポジウムが開かれた。川劇の同名の作品を歌劇化したもので、山東歌舞団が上演すべく準備万端ととのえたが、直前になって、中止と決まった。文革中に台本は全て焼かれたが、譜面は作曲者の劉源氏が隠しておいた。台本を復元して、来年2月の生誕百周年に上演できるよう、いま関係者が努力を重ねている。(『人民日報』海外版、五月七日の報道による)

◆老舎の長篇二作がテレビドラマとなる。一つは『二馬』で、演出は池好放。老馬を演ずるのは陳道明で、「この役を上手く演じられなかったら、このあと二度と芝居をしない」と意気こんでいるという。もうひとつは『離婚』で、これはかつての映画化(王好為監督)につづく二度目の脚色。演出は北京電影学院の馬軍驥助教授、老李を演ずるのは葛優。十六回の連続ドラマとなる。(『文学報』「文学大衆」五月七日号の報道による)

◆北京市東城区の老舎故居の復元工事が順調に進んでいる模様で、今年十月には建物ができ上り、来年2月3日には一般に公開される予定である。もとの姿をそっくり再現すべく、資料、作業ともに十分に吟味されているという。(舒済女史より中山時子先生への通信による) [なお、中山先生を中心とする募金活動については、皆様すでにご承知でしょう] (杉本達夫)

「老舎百年国際学術シンポジウム」開催について

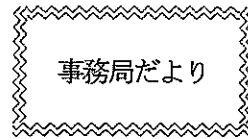
事務局

1999年2月3日老舎生誕百周年を記念し、2月3日から7日まで、「老舎百年国際学術シンポジウム」が北京で開かれます。

中心テーマは「老舎和二十世紀」。参加されたい方は下記に直接連絡して申し込み書もらってください。または事務局にお申し出ください。

中国老舎研究会 舒乙先生

北京、100011、安外東河沿8-206



◆96年7月26日(金)老舎研究会総会において下記のように委員の交替および事務局の移動が承認されました。

代表委員：杉本達夫

常任委員：渡辺武秀(東北地区)

小島久代、高橋由利子、
平松圭子、布施直子(東京地区)

日下恒夫、倉橋幸彦、
小林康則(関西地区)

事務局：大東文化大学中国語学科
207(平松)研究室

◆事務局の移動により会報編集も東京に変わりました。よろしくお願ひします。

◆この号の編集についてはご執筆各位に無理をお願い申し上げました。

◆各地の老舎読書会や老舎の研究会についての紹介、老舎や作品に関連するエッセイ、論文、書評など、会員各位の投稿をお待ちします。

◆1997年度第14回老舎研究会は7月25日早稲田大学で開催されました。研究者、発表テーマは本文をご覧ください。

老舎研究会会報第12号(1998年7月22日)
〒175-8571 板橋区高島平1-9-1
大東文化大学中国語学科207(平松)
研究室内

老舎研究会事務局

TEL: 03-5399-7370 (中国語学科事務室)

FAX: 03-5399-7371 (")